

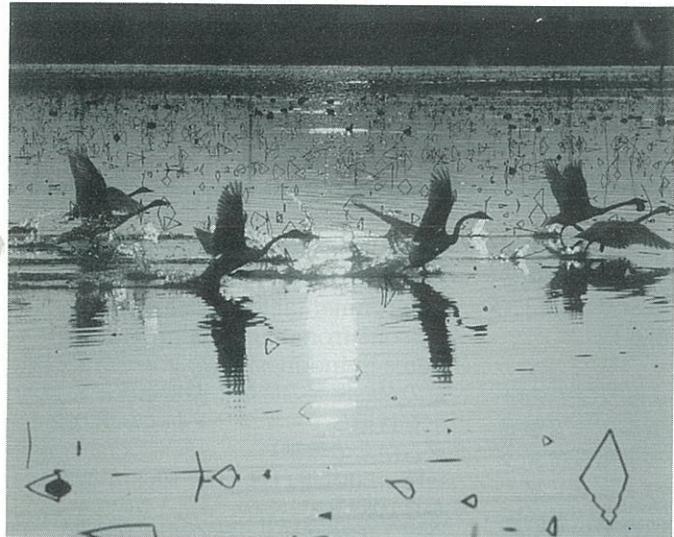


ニュースレター No. 38 2001年(平成13年)8月  
**NEWSLETTER**  
 INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE FOUNDATION

財団法人 国際湖沼環境委員会

—よりよい湖沼管理をめざして—

このニュースレターには英語版もあります。



**応募総数のうち、海外からの応募が429件で全体の48%を占め、国内外を通じ世界湖沼会議に対する期待の大きさが伺われる結果となりました。また、地域別にみると、アジアが187件、ヨーロッパが147件、アフリカが48件、北米が20件、南米が14件、オセアニアが3件、日本が481件となり、湖沼環境について深刻な問題を抱える開発途上国から多くの応募があったことで、国枠を越えて持続可能な湖沼管理の道を探る会議となることが期待されます。**

**企画委員会および各分科会各部において、発表文の審査・選考が行われ、オーラル発表202件、ポスター発表666件、総計868件(74カ国)の採用が決定されました。**

発表内容の決定と併せてプログラム構成も確定し、特に関心の集まる会議初日の基調講演では、世界水パートナーシップ(本部スエーデン)代表のマーガレット・カトレイ・カールソン氏から世界の淡水資源問題に関する講演が行われるほか、マレーシア出身の国連大学高等研究所長のA・H・ザクリ博士や川那部浩哉琵琶湖博物館館長の3氏による基調講演が行われる予定です。また、各分科会の中でも、基調鼎談：水の未来を語る(第1分科会)、子供湖沼会議(第2分科会)、パネル討論：市民、科学者、行政、産業、ジャーナリズムはどのように環境情報を共有するか(第3分科会)、基調講演：沿岸湿地生態系の持つ特別な価値とこれを次世代に伝えるために市民が果たすべき役割(第4分科会)、シンポジウム：参加

型湖沼流域経営の必要性と可能性(第5分科会)など、それぞれの分科会の趣旨に沿った企画がプログラムされました。この他、「アラル海再生にむけて」と題したワークショップが新たに設けられることとなり、アラル海の研究を行っている現地の研究者も交え、既に発生している環境問題を総括し、現段階における最善の湖沼保全策を模索する内容で準備が進められています。

**会議の総括となる宣言に関しては、21世紀の最初の年に開催される世界湖沼会議であることから、湖沼の保全や管理に関する国際的な指針となるような宣言を出すべく作業委員会が設けられ準備が開始されています。世界湖沼会議の最終日に、「琵琶湖宣言2001」として公表される予定です。**

今回の話題

- 第9回世界湖沼会議関連ワークショップ
- UNEP-IETC/滋賀県/ILEC共同シンポジウム
- NGO紹介
- 第3回世界水フォーラム キックオフミーティング
- 新ILEC科学委員&新事務局長紹介

- ISSLR会員募集のお知らせ
- 世界の湖沼(ミシガン湖)
- 湖沼水質保全研修
- 世界環境デー記念写真展
- お知らせ&新刊案内



## 第9回世界湖沼会議

### 会議発表者決定

発表予定総数：74カ国868件

(うちオーラル発表202件、ポスター発表666件)

#### 会議参加予定国（74カ国）：

アルバニア、アルゼンチン、アルメニア、オーストラリア、オーストリア、バングラデシュ、ベラルーシ、ベルギー、ベナン、ブータン、ボツワナ、ブラジル、カメルーン、カナダ、中国、デンマーク、エクアドル、エジプト、エストニア、フィンランド、フランス、グルジア、ドイツ、ガーナ、ハンガリー、インド、インドネシア、イラン、アイルランド、イタリア、日本、ケニア、韓国、ラオス、ラトビア、レバノン、リトアニア、マラウイ、マレーシア、メキシコ、モルドバ、モンゴル、モロッコ、ネパール、ニュージーランド、ナイジェリア、パキスタン、ペルー、フィリピン、ポーランド、ロシア、スリランカ、スウェーデン、イスス、台湾、タンザニア、タイ、チュニジア、トルコ、ウガンダ、ウクライナ、イギリス、ウルグアイ、USA、ウズベキスタン、ベトナム、ジンバブエ、アルジェリア、ボリビア、ブルガリア、スロベニア、タジキスタン、マケドニア、ルーマニア

### ◆自主企画ワークショップ

**会** 期中の11月13日～15日の各夕方に大津プリンスホテルで行われる予定の「自主企画ワークショップ」への応募総数は、13カ国49件となり、そのうち13件（日本：10件、ジンバブエ、ロシア、USA各1件）の採用が決定しました。同ワークショップは、琵琶湖セッションや各分科会で取り上げられなかった課題、複数の分科会にまたがる課題などについて、発表者が自ら企画し発表・討論を行うためのものです。採用されたテーマは、「世界湖沼会議NGOワークショップーわたくしたちが拓く水の世紀ー」、「今昔写真で探る世界の湖沼の百年—国際共同プロジェクトからー」、「途上国における水質モニタリングに関するワークショップ」などを含む多彩な内容で構成されています。同ワークショップの内容に関する詳細は、湖沼会議ホームページで随時紹介されます。また、Ilecの理事でもある東京農工大学の中山幹康教授らにより開催されるワークショップの内容は次のとおりです。

#### ■ワークショップ「モンスーンアジアでのダム開発の経験：環境と住民の共生を目指して－サグリンおよびチラタ・ダムからの教訓」

##### 開催のお知らせ

インドネシア、日本、スリランカの研究者からなる約10名の国際チームが過去10年間に亘って、インドネシア・ジャワ島のサグリンおよびチラタ・ダムに関する調査を継続的に実施しています。モンスーンアジアにおけるダム開発が環境と住民の共生を実現するための知見を得ることが当初からの調査の目的です。

この度、2001年11月11～16日に滋賀県大津市で開催される第9回世界湖沼会議(<http://www.biwako2001.com>)の一環として、これまでの調査の結果を概観すると共に、今後の研究の方向を探求するためのワークショップを開催します。ダム開発が環境に与える影響、特に移住者の居住環境に焦点を当てます。興味をお持ちの方はぜひご参加下さい。

題目：Dam Development in Monsoon Asia with Sustainable Human and Environmental Resettlements – Lessons from Saguling and Cirata Dams in Indonesia (モンスーンアジアでのダム開発の経験：環境と住民の共生を目指して－サグリンおよびチラタ・ダムからの教訓)

日時：2001年11月13日（火）午後7時から10時まで

会場：大津プリンスホテル 宴会場「伊吹」(〒520-8520 滋賀県大津市におの浜4-7-7)

主催：サグリン・チラタ・ダム調査チーム（インドネシア、日本、スリランカの研究者で構成）

参加費：無料。但し第9回世界湖沼会議の参加者であることが前提。

申込：不要。会場の収容人数は50人。言語：英語。同時通訳無し。

問い合わせ先：東京農工大学・大学院連合農学研究科 中山幹康

〒183-8509 東京都府中市幸町3-5-8

Tel: 042-367-5667

Fax: 042-360-7167

e-mail: mikiyasu@cc.tuat.ac.jp

### 世界湖沼会議 NGO ワークショップ 企画委員会

**本** 年11月の世界湖沼会議にあわせて開催される、国内の関連NGOによるNGOワークショップの第1回目の企画委員会が3月3日、栗東芸術会館“さきら”で、第2回が5月26日、草津エルティーホールで開かれた。出席した企画委員は、国内の水環境関連のNGOを代表するのべ16名。同ワークショップをどのような会議にするかについて活発な議論が交わされた。上記の企画委員会は、湖沼会議市民ネットが昨年12月に琵琶湖博物館で開催した世界湖沼会議プレNGOワークショップにおいて、その設置を提案したもの。第1回企画委員会では、まず委員長としてびわ湖自然環境ネットワークの寺川庄蔵氏を選出。ワークショッ

プの日程としては、11月の湖沼会議の前日10、11日および会期中の14日に定め、ワークショップの成果物の一つとしてNGO宣言を取りまとめる 것을決定した。また第2回委員会では、詳細なプログラム内容が決定された。今後の予定としては、8月中にNGO宣言のための起草部会を立ち上げる。また、このNGO宣言をより多くのNGOの総意、共同宣言の形にするために、関連NGOに呼びかけた調整会議を7月22日に開催する。

湖沼会議市民ネット事務局次長  
井手慎司

## 第9回世界湖沼会議

### 途上国における水質モニタリングに関するワークショップ

自主企画ワークショップとして上記テーマで、11月15日(木)午後7時から10時まで大津プリンスホテルにてワークショップを開催します。途上国の湖沼にて水質モニタリングを行っている技術者を集め、情報交換を行うとともに、ILEC科学委員（ブラジルのツンディシ委員、ジンバブエのマガツツア委員）らにより、海外における湖沼水質モニタリングの現状報告などを行う予定です。また、ILEC-JETA/Horibaにより開発された水質測定機器の現状と、琵琶湖における水質モニタリングの事例を紹介し、今後あるべき測定項目および手法についても検討していきます。参加予定人数30～50名。

申し込みおよび問い合わせ：ILEC（担当：宇山）  
電話：077-568-4571 FAX：077-568-4568  
E-mail: monitoring@mail.ilec.or.jp  
\*当日参加も可能

### ◆企画委員会ワークショップ

「アラル海再生に向けて」  
(Aral Sea crisis and its rehabilitation)  
上記テーマで11月14日（19:00～22:00）に企画委員会ワークショップが開催されます。

世界第4位の湖面積をもつアラル海は、消滅の危機に瀕しており、この1～2年内に湖面積は3分の1になり、3つの小さな湖に分断・分割されると予想されています。このような事態を眼前にして、すでに発生している環境問題を総括し、現段階における最善の湖沼保全対策を模索します。また、アラル海流域の環境問題を写し出した写真も会場に展示される予定です。  
内容は次のとおりです。

### 湖沼水質解析トレーニングコース

会期終了後の11月17日と18日に ILEC, UNEP-IETC および建設省琵琶湖工事事務所の3者共催で、湖沼水質解析トレーニングコースが開催されます。内容は、湖沼の水質の変化を予測するために富栄養化解析モデルについて、現在広く用いられているボックスモデル、2層モデル（PAMOLARE2L）、および3次元モデルを用いた数値解析に関する研修です。講師はILEC科学委員長であるS.E.ヨルゲンセン教授他。定員は30名。

会場：ILEC, UNEP-IETC事務所

参加費用：150ドル（教材含む）

途上国からの参加者については、10名が主催者により招待されます（8月上旬までに決定）

問い合わせ：ILEC（担当：宇山）

電話：077-568-4571 FAX：077-568-4568

E-mail: workshop@mail.ilec.or.jp

### 1. 湖沼の現状と環境問題

- アラル海の干上がりと自然環境変化／堀川真弘（大阪府立大学大学院生）
- アラル海周辺地域住民の健康／橋爪真弘（東京大学大学院研究生）
- アラル海の水質と生態系／William Williams（ILEC科学委員）
- 2. 湖沼保全対策
- 大アラル海の保全対策／Razakov（ウズベキスタン自然保護委員会）
- 小アラル海の保全対策／Roman Jashenko（カザフスタン動物学研究所）
- アラル海保全の国際協力／Walter Rast（ILEC科学委員）、Nicholai Aladin（ILEC科学委員）

### UNEP-IETC/滋賀県/ILEC 共同シンポジウム

#### “湖沼管理における住民と地方自治体とのさらなるパートナーシップの促進” 開催に向けて着々と前進

11月8（木）、9日（金）の2日間、第9回世界湖沼会議のサイドプログラムとして琵琶湖博物館において、国連環境計画・国際環境技術センター（UNEP-IETC）、滋賀県、（財）国際湖沼環境委員会（ILEC）の共催で、「湖沼管理における住民と地方自治体とのさらなるパートナーシップを促進する」をテーマに国際シンポジウムが開催されます。シンポジウムでは、国内外の湖沼管理におけるパートナーシップ事例の紹介を通して情報・経験の共有をはかるとともに、両者の対話を通じて住民・行政の役割を認識し、これからパートナーシップのあり方を考えていきたいと思っています。また国際的なネットワークの代表を招

いて、湖沼の問題を地球規模で考え、ともに行動していくことの重要性についてみんなで議論したいと考えています。7月には第4回実行委員会が開催され、7湖沼および3つの国際NGOの発表者が決定しました。このシンポジウムは湖沼管理に携わる「住民（市民、N G O, N P O, 種々の地域グループを含む）」と「地方自治体」の相互理解を深め、湖沼問題の解決に向けて21世紀における新たなパートナーシップを創り上げていくことを目指しています。湖沼保全に関心のある住民および湖沼管理に関わる地方自治体関係者の積極的な参加をお待ちしています。

同シンポジウムへの参加は無料で、言語は英語および日本語で行われる（同時通訳あり）。

問い合わせ先：ILEC（共同シンポジウム担当）

電話：077-568-4576 F a x : 077-568-4568

E-mail : jspalm@mail.ilec.or.jp

## 第9回世界湖沼会議

### NGO紹介

#### ◆湖沼会議市民ネット

**湖** 沼会議市民ネット（「湖沼ネット」）は、2001年11月滋賀県において開催される第9回世界湖沼会議に向けて設立された環境NGOグループです。行政や企業、研究者を含むできるだけ多くの“市民”や“住民”的皆さんに湖沼会議に、そして会議に向けた活動に参加してもらうことを目標として活動を行っています。現在400人近くの会員が登録されています。

予定している湖沼会議関連プロジェクト：

- 1) グローバル・ネットワーク  
(テーマ：国際交流、発見、プライド)
- 2) 100万人プロジェクト  
(テーマ：幅広い参画、自然への愛情、山から湖へ(流域、循環))
- 3) 葦(よし)！どこまでもいこう  
(テーマ：誰もが気軽にのぞける湖沼ネットの入り口をつくる)

湖沼会議市民ネットホームページ：  
<http://www.ses.usp.ac.jp/2001biwa/>  
E-mail：  
[2001biwa@ses.usp.ac.jp](mailto:2001biwa@ses.usp.ac.jp)  
[koshonet@mail.ilec.or.jp](mailto:koshonet@mail.ilec.or.jp)

#### ◆びわこ会議

びわ湖会議の20年とこれから  
びわ湖会議事務局長 林 美津子

びわ湖会議は、市民と行政が協力関係を結び環境問題に取り組んでいるネットワーク協議会です。会員は、85県域団体と50市町村および個人会員30人で構成されています。昭和52年（1977年）、琵琶湖で初めて赤潮が大量発生したのを発端に粉石けんの使用推進運動が盛んになりました。その後主婦達を中心としたこの運動は、昭和55年（1980年）びわ湖条例施行という大きな成果を見るにいたりました。石けん会議発足10年後には、家庭排水や身近な河川の水質浄化等運動の幅を広げ、名称も「びわ湖会

議」と改め現在にいたっています。20年余を経過したいま、多岐にわたる環境問題への新たな取り組みとして「エコキッチン革命」を提唱しています。これは家庭の中で最も環境に負荷を与える場所である台所に着目し、水環境保全、ごみ減量、省エネなど環境に配慮した生活の実践を県で全域に広めたいと考えています。世界湖沼会議に関しては、1984年に大津で開催された第1回目の世界湖沼会議で当時の主婦達の石けん運動を紹介したのを始め、それ以来ほぼ毎回会議の分科会で発表を行っています。1995年に霞ヶ浦で開催された第6回目の会議には、20名が参加しました。本年11月に滋賀県で開催される第9回世界湖沼会議では、「水」「女性」「くらし」をキーワードに自由会議を開催し、県外からもパネラーを招いて活動事例を学ぶと共に一人でも多くの方にびわ湖を知ってもらいたいと願っています。

事務局：  
滋賀県 エコライフ推進課内  
TEL: 077-528-3491

### 会議レポート

#### 第3回世界水フォーラム キックオフミーティング（京都）

2003年3月に京都、滋賀、大阪を結んで開催される第3回世界水フォーラムに向けてキックオフミーティングが、6月初旬京都で開催されました。ILECとしての公式の発表はなかったものの、ILECを代表し、ヨルゲンセン委員長、中村委員、ムハンディキそしてバラトールが参加しました。

**今** 回の会議では、参加者も多く、2003年に向けてどのような企画がなされているのかが明確に示され、橋本龍太郎氏とMahmoud Abu-Zeid氏による来賓の開会挨拶が行われた後、すぐさま会議に移るという慣例に従わない自由な雰囲気の中で活発な討論が行なわれました。討論は4名から8名による円卓形式で行なわれ、それぞれが2003年の会議を成功に導くための具体策について討議し、案を出し合いました。その後、これらの案は会場の2つの大きなスクリーンに映し出され、それを元にして討論会が行なわれました。ヴァーチャル水フォーラムを含むこのような明白で開かれた手法は、参加者の意志を反映

できるように考えられています。すばらしい！私も実際に自分の意見が反映されるように感じたのでした。

残念ながら、ハーグで行なわれた第2回世界水フォーラムやその成果である世界水ビジョンと同様に、今回の企画過程の中においても湖沼問題の取り扱いに関しては、あまり重要視されていないように感じます。湖沼が地球の水循環の中で明らかに重要な存在であり、また人類による影響に左右されやすい生態系の代表であることを考慮すると、このことは注目すべきことです。さらに湖沼は、容積でいうと地球上の淡水の大半を占めています。フォーラムが、水質悪化などの湖沼問題を充分に取り上げることなく、その開催目的を遂行できるとは考えにくいものです。

第3回世界水フォーラムの詳細はフォーラムのホームページにアクセスしてください。  
<http://www.worldwaterforum.org>

## 新ILEC科学委員&新事務局長 紹介

チェコのストラスクラバ博士およびガーナのアイボテレ博士のILEC科学委員辞任に伴い、後任委員として2001年4月、新たにロシア出身のニック・アラディン教授と米国出身のウォルター・ラスト博士が、ILEC科学委員に加わりました。

アラディン教授は現在、セント・ペテルブルグにあるロシア科学アカデミー動物学研究所にて教授をつとめ、塩湖の専門家でもあります。教授は、これまでに非常に多くの現地調査を行ってこられ、アラル海へは37回、カスピ海へは18回もの調査を実施されています。また、今までに136の論文を執筆（または共同執筆）されています。ILEC科学委員としての最初の論文発表は、第9回世界湖沼会議において“カスピ海での大規模な生物学の大変動の脅威”というタイトルで発表を行う予定です。地球規模の気候変動の問題が拍車をかける中、世界の陸地にある水資源の約3分の1が、塩分化による影響を受け続けています。アラディン教授が科学委員副委員長のビル・ウィリアムズ教授と共に、世界の塩湖についての貴重な意見、助言を提供してくれることを期待しています。

ラスト博士は現在、テキサス州オースティンにあるサウス・ウェストテキサス州立大学の準教授であり、水科学局の局長を務めておられます。また、博士は最近になり、オンタリオ・ワインザーにある五大湖国際共同委員会で環境科学者の地位にも着かれています。それ以前には、ケニヤのナイロビにあるUNEP（国連環境計画）本部で水資源部門の次長を務めてこられました。博士は水資源管理、水化学・陸水学、そして環境モデリングの分野を専門とされています。最近では、UNEP-IETCとILECのショートシリーズ第1巻“天然湖と人口湖：類似性、相違点、そしてその重要性”の共同執筆者としてILECに貢献してくださいました。



ニック・アラディン教授



ウォルター・ラスト博士

### ILEC新事務局長紹介

本年4月1日づけでILECの新事務局長に清水貞美氏が就任しました。清水氏は、滋賀県職員を経て財団法人滋賀県産業支援プラザ理事などを務めておられます。「ILECにおいてはこれまでの経験を活かし、業務の着実な前進のため精一杯努力して参りたい」と抱負を語りました。なお、1999年から2年間事務局長を務めた小谷博哉氏は、今後も専務理事としてILECの活動に関わっていきます。



清水貞美氏

## 国際塩湖研究協会 (ISSLR) 会員募集のお知らせ

第7回塩湖研究国際会議（1999年アメリカ合衆国のデスバレで開催）後、国際塩湖研究協会 (ISSLR) が設立されました。

ISSLR設立の目的は、あらゆる側面で内陸塩水に関する人々の効果的な連絡関係を確立し、関心をさらに高め、また塩湖の科学的な利用、管理および保護に関する一般市民の教育にあります。会員の特典としては、塩湖研究者の会員リスト、検索可能な塩湖の研究目録、塩湖のディスカッショングループ、個々の研究目録のアップロード、および関連研究の情報や会議の適時通知にインターネット

アクセスできることなどが含まれ、また2001年度の会費は無料となっております。

会員登録に関する詳しい情報は、ISSLRホームページ  
<http://isslr.org/membership/index.htm>  
をご覧ください。  
みなさんの登録参加を心よりお待ちしております。  
みなさんの会員登録および参加が、内陸塩水に没頭する強く発展的な研究会を築き上げる手助けとなります。

#### 問合せ先：

Dr. Robert S. Jellison,  
Secretary/Treasurer  
International Society for Salt  
Lake Research  
UC/Sierra Nevada Aquatic  
Research Laboratory  
Rt. 1, Box 198, Mammoth  
Lakes, CA, USA 93546  
E-Mail:jellison@lifesci.ucsb.edu

## ミシガン湖（U.S.A.） 一生涯の疑問一

トム・バラトール

**私**は、ミシガン湖から十キロメートル程離れたシカゴの郊外で育った。正直なところ、大学生になるまで私は湖や環境について殆ど関心がなかった。しかし、考えてみると物心がついた頃から、ミシガン湖は私の生活の中で大きな存在であった。あれは私が五歳ぐらいのころだった。私達家族が毎週金曜日に行く魚料理レストランで（カソリックは金曜日には肉を食べることができなかったのだ）「湖の魚はあまり食べない方が良い」と言わされたことがある。そのころ、それは巷の噂で皆がささやきあっていることであった。その後、他のたくさんの州を訪れ気づいたのだが、どの州で飲んだ水も私が小さい頃から飲んでいたミシガン湖の水に比べてはるかにまずいのだ。そこで、私に一つの疑問が浮かんだ、「なぜ、飲んで美味しいこの水に住む魚食べることが危ないことなのか？」もちろん当時、食物連鎖による生物濃縮という現象は知るはずもなかった。専門家によると、なんとミシガン湖からの飲料水を一生涯飲み続けた場合のP C B摂取量は、湖に生息するマス一匹を食した場合に摂取する量とほぼ等しいとのことだ。

金曜日に通ったそのレストランはミシガン湖の近くにあり、毎週、ハイウェイでそこに向かう途中、ミシガン湖に

巨大な国際船が停泊しているのが見える。子どもだった私にとって、それは心が踊る光景であった。湖はアメリカ大陸の中にあるのに、なぜあのような巨大な舟が世界中から集まって来られるのか、不思議でならなかった。シカゴは百年以上前には、既に、農産物の輸出の中心地として栄えていた。それに伴い、製造業の中心地としても繁栄し始めた。私が見た船は穀物と製造品を搭載していたのだ。この産業の繁栄は、私たちの家族に職を提供し、そこから得た所得で、私達は産業活動により汚染された湖の魚を食べにレストランに通う。一というような私達家族と産業の繁栄は不思議な関係にあった。

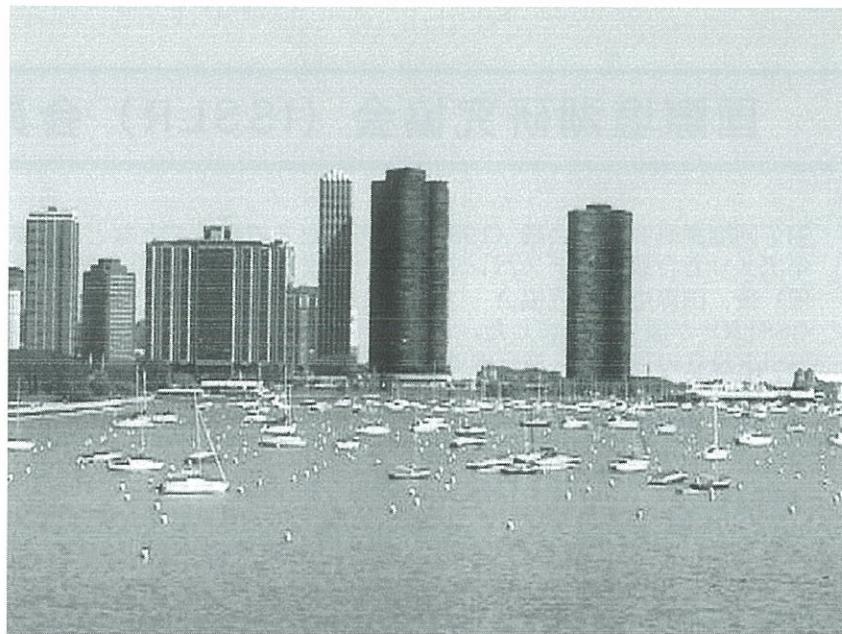
**私**は、それまで何度もハイウェイからミシガン湖を眺めてはいたものの、初めて湖を訪れたのは高校生になった頃であった。高校生活では夏になると湖岸へ出かける。インディアナ州の湖岸には砂丘があり、くつろぐのに最適なところだ。私が湖を見て一番驚いたのは、対岸が全く見えないということであった。ところが最初、私は水に入るのが怖かった。なぜなら、これまでに聞いた湖に関する悪い噂が脳裏を横切ったからだ。しかし実際、ミシガン湖は非常に透明度が高く（それは、汚染されていない証明にはなり得ないが）、なぜこれほどに美し

い水が汚染されているのか？これが、私の湖に対する興味の始まりであった。結局、私は、美しい水と美しい女の子（当時好きだった同級生）に誘われて、水に入らざるを得なかった。

**そ**の後の彼女の消息はわからないが、今のミシガン湖の状態は良好だ。三十年前と比べれば、化学物質の負荷量は減少し、栄養塩の流入も減ってきたため、富栄養化の危機からは脱した。しかし、湖が完全に美しく回復したとは言えない。いまだ、化学物質汚染による遺物として、湖に生息する魚達の体内に残留性化学物質が残っている。だが、以前に比べれば、ミシガン湖の状態は遙かにましになつたと言えるだろう。子供の頃の疑問の全ては、解決していないが、大学等で学ぶにつれ、新たな疑問が生まれた。湖流域で行なわれる畜産業からの排水に含まれる環境ホルモン。これは、私の生まれてくる子供にどのような影響があるのか？温暖化が原因で起こる気候変動は、ミシガン湖にどのような影響を与えるのか？水位が上がるのか？それとも、下がるのか？外来種による被害が拡大するのか？これらの疑問への答えを見つけるには何十年もかかるであろう。だから、ミシガン湖は私の生涯の一部となるのだ。

ミシガン湖のデータ

海拔	176 m
長さ	494 km
幅	190 km
平均水深	85 m
最大水深	282 m
容積	4,920 km <sup>3</sup>
流域面積	175,800 km <sup>2</sup>
湖	57,800 km <sup>2</sup>
土地	118,000 km <sup>2</sup>
合計	175,800 km <sup>2</sup>
湖岸線の長さ	2,633 km
滞留時間	99年
アメリカ (1990)	10,057,026人
カナダ (1991)	0人
合計	10,057,026人



米国環境保全局の「The Great Lakes: An Environmental Atlas and Resources Book」より引用

## 研修

### 平成12年度 JICA/ILEC湖沼水質保全研修

平成13年1月4日～3月18日  
インドの研修員Rangasamy Azhagesan氏の手記

安全で十分な水の供給と環境衛生は、社会的経済的開発の持続においては常に最優先事項です。統合された水資源計画や管理の必要性が認識されており、あらゆるタイプの相互に関連した淡水域を扱い、水質および水量の問題を考慮に入れなければなりません。このことは、あらゆる国々においても関係あることです。全体的枠組みの中で、水利用の効率化向上、限られた資源の汚染防止、あらゆる水資源の存在確認と持続可能な生態的バランスの維持を保証するような活動計画を実施しなければなりません。

ILEC/JICA主催の湖沼水質保全研修は、途上国におけるこれらの必要性を増進させます。また、この分野における途上国の必要性を統合し、解決策を与えることは、すばらしい努力であるといえます。

滋賀県は、琵琶湖の水質向上と持続に向けて、またこの水を利用する1400万人もの人々のために継続的な努力を行っています。我々が訪問した地域の自動下水・屎尿処理施設は、たいへん印象に残っています。また、子供からお年よりまで人々の環境に関する情報交換、意識そして係わりと協力は、不可欠なものであり、マザーレーク（母なる湖）の保全が、人々の意識に深く根付いていることを知ることができました。



## イベント

### 世界環境デー記念写真展 「水のある風景」

6月5日の「世界環境デー」を記念して、本年6月2日(土)～6月9日(土)まで国連環境計画 国際環境技術センター(UNEP-IETC)にてUNEP-IETCとILEC共催の写真展「水のある風景」を開催しました。「世界環境デー」は1972年の国連総会決議に基づき6月5日と定められたもので、毎年この日を中心に、世界各国において環境保全の重要性を訴える諸行事が行われています。今回の写真展では、滋賀県が主催するびわこフォトコンテスト入賞作品や草津湖岸コハクチョウを愛する会員の方々の作品を中心に、滋賀の湖、河川、沼、水鳥や植物などをテーマに完成度の高い作品65点を展示了しました。期間中の入場者数は510人で、自然と自然の中で生きる人間の関係を感じ取ってもらうことができました。

協力：滋賀県、(財)淡海環境保全財団、草津湖岸コハクチョウを愛する会、他



Biyoセンター(琵琶湖淀川水質保全機構)、琵琶湖研究所、琵琶湖博物館などの多くの機関、また動く図書館ともいうべき吉良先生、簡潔で感銘的な松井先生など講師の先生方からたくさんのこと学ぶことができました。講義のやり取りはたいへん有用で、講義で直接話される内容が少ない場合でも、彼らの経験内容からモニタリングや管理でどのような誤りが起こるのかなどを知ることができ、たいへん重要になります。

湖沼管理についてあまり情報がないままやってきましたが、研修を終え、たくさんの技術と的確な教材を頭とカバンの中に持ち帰ることができます。

その他にも竹田氏からはヨシの必要性について学び、彼のヨシを使った創作作品は記憶に残るものでした。竹田氏をヨシ専門家と呼んでも間違いないでしょう。

“マザー”レイクは、我々を暖かく歓迎してくれ、生活面においてもシベリアからの冷たい風と輝く雪に凍えることなく暖かい宿泊施設で快適に過ごすことができました。また、日本語を学んだり、KIFAとホストファミリーを通して地元の食べ物や文化に触れる機会も研修中に得ることができました。

直接もしくは間接的に研修に係わり、成功に導いてくださった皆さんに心より感謝いたします。

# お知らせ

## 会議

### ■ 第6回リビングレイクス

日時：2001年7月30日～8月2日

場所：ロシア連邦内ブリヤート共和国 首都ウランウデ  
バイカル湖

テーマ：「湖沼地域における水質と伝統」

” Water Quality and Traditions in Lake Areas”

主催：Global Nature Fund(GNF)

E-mail: info@globalnature.org

現地連絡先：GRAN/E-mail: ecoinfo@ulan-ude.ru

### ■ ストックホルム水シンポジウム

日時：2001年8月12日～18日

連絡先：Stockholm International Water Institute (SIWI)

E-mail: siwi@siwi.org

http://www.siwi.org

### ■ 第5回世界閉鎖性海域環境保全会議 (EMECS 2001)

会期：2001年11月19日（月）～22日（木）

会場：神戸市／淡路島

連絡先：第5回世界閉鎖性海域環境保全会議

実行委員会事務局

TEL: 078 252 0234 FAX: 078 252 0404

E-mail: 2001@emeecs.or.jp

URL http://emeecs2001.jtbcom.co.jp

## 生態学琵琶湖賞

第11回生態学琵琶湖賞の推薦書の受付が終了しました。

http://www.ilec.or.jp/prize/j-index.html

# 新刊案内

### ◆ 「湖沼と貯水池—研究と管理」第6巻

第1部 2001年3月

ISSN1320-5331 年4回発行

今回のILECジャーナルは、次のような内容が収められている。

「改善対策の基準としての湖沼の限界負荷評価：基本概念のレビュー」、「モータボートがもとで蓄積された砂丘湖の沈殿物中の多環式芳香族炭化水素残留物」、「生態系かく乱モデルを用いたバイカル湖生態系作用の予測」、「外部負荷削減に関するルガーノ湖の栄養化の進展：酸素バランスと生物学的パラメータに加えたリンおよび窒素の変化」、「南アルプスの高地湖に関する化学的生態学的特徴」など

### ◆ 「湖沼と貯水池—研究と管理」第6巻

第2部 2001年6月

ISSN1320-5331 年4回発行

内容：

「湖沼と社会：持続可能な社会への湖沼の貢献」、「河川域規模での表流水水質管理の枠組み：イタリア北部 イゼオ湖の事例」、「ビクトリア湖における湿地利用と影響」、「日本の中海と宍道湖の堆積物中における水銀汚染の記録」など

### ◆ 「湖沼と貯水池—研究と管理」2000年度報告書

ジャーナル購読のオンラインサービスが開始され、アクセス増加に焦点をあてた報告書。

ジャーナル購読についてのお問い合わせ先：

ジャーナルホームページ

www.blackwell-science.com/lre

Journal Subscriptions, Blackwell Science Asia

PO Box 378 (54 University Street) Carlton South,  
Victoria, 3053, Australia

Tel: +61 3 9347 0300 Fax: +61 3 9347 5001

E-mail: subscriptions@blacksci-asia.com.au



INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE FOUNDATION

Secretariat

1091, Oroshimo-cho, Kusatsu-city, Shiga 525-0001, Japan

Tel : +81-77-568-4567

Fax : +81-77-568-4568

e-mail : info@mail.ilec.or.jp

URI: http://www.ilec.or.jp/

財団法人 国際湖沼環境委員会事務局

〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091

TEL: 077-568-4567 FAX: 077-568-4568